絆のビアガーデン
～夕日とクラフトビールが運ぶ世代の架け橋～

BluStellar

あらすじ：

夕焼けに染まるビアガーデンを舞台に、会社のワークショップを終え、先輩かおると後輩あかねの世代の異なるふたりが、家庭の悩みを語る中でコミュニケーションに大事なことは何かを考える。共感を呼ぶエピソードを共有しながら、互いの成長をクラフトビールと共に味わう。

8月の夕日が注ぐビアガーデンの温もりが、チーム全体の心地よい雰囲気を作り上げるなか、立川かおるは琥珀色に輝くビールを傾けていた。その40代をイメージしたというビールは、まるで夕日の光を飲み込んだかのような暖かな色調、彼女の人生経験を表す円熟味のように感じられた。一方、鈴木あかねが選んだのは、静けさを感じさせるブルーの色合いで、30代をイメージしたというビールだった。その色は、仕事終わりの喧騒からすっと抜け出したような、清涼感を誘うものだった。

あかねが柔らかい微笑みで「立川さん、お隣いいですか？」と尋ねると、かおるは即座に「もちろんです、鈴木さん」と快活に返答し、あかねは隣に腰を掛けた。あかねはリラックスした様子で続けた。「未来ビジョンワークショップの準備は大変でしたが、かおるさんからもアドバイスいただいたおかげで、本当にやりがいのある仕事でした。」

かおるは、うなずきながら「確かに、若手社員があんな風に成長するとは思わなかったわ。特に、鈴木さんがサポートしていた佐藤さんの最後のスピーチは良かったよ。鈴木さんの指導が素晴らしかったんだろうね。」

あかねは照れたように、「佐藤さん、最初の頃は表情も硬かったんですけど、振り返りのセッションで色んな気付きを得たようで、チームでのコミュニケーションもみるみる円滑になっていった感じでした。それに、立川さんのアドバイスが的確で、本当に助かりました。具体的なご指導、伺っていて勉強にもなりました。」

かおるは、「その通りだね。みんな年齢差や立場の違いがあってチームのバランスを取るのは難しいけど、それぞれの成長が見られるのは嬉しいわ。今回のワークショップを通じて、それがよくわかった。お疲れ様、鈴木さん！」

あかねも笑顔でグラスをそっと合わせて乾杯した。「ありがとうございます、立川さん。チームの雰囲気を良くしていこうと思って、微力ながら頑張った甲斐がありました。本当、立川さんのサポートのおかげですね。」グラスの音がビアガーデンに響いて、冷えたビールが喉を潤した。

かおるはあかねに話題を自然に展開し、「新しい生活がスタートして、会社の方にも何か影響出てきた？それとも、すんなり新しいペースに慣れた感じかな？」と尋ねると、あかねは少し照れた笑みを浮かべながら、新婚生活の感想を話し始めた。「最初のうちは、慣れないマイホームの掃除やら、食材の買い出しやらで、ちょっとワタワタしちゃったんです。でも、週末ごとにプチ旅行気分で、『今日はどの街を探索しよう！』なんて、街ランチ発掘しているんですよ。目黒川沿いでワッフルランチしたり、下北沢で知らないレコード屋さんに飛び込んでコーヒーブレイクしたり。まだ手探りだけど、頼りになるアプリでクーポンとか見つけてお得に楽しんじゃってます！」

あかねの目は輝いていて、喜びがにじみ出ていた。しかし、少し表情を曇らせると、本音がこぼれ落ちた。「家事はわりと分担しているんですけど、料理は自分が主担当だから、どうしても手を抜きたくなくて。そのせいで、平日に仕事が終わった後の食事の準備が結構大変に感じることがあるんですよね…。」

かおるは穏やかに応じた。「わかるわ、平日の食事の準備は本当に大変だよね。うちも共働きだから最初のうちは、毎日バタバタしてたの。でも、『チャチャメシ』って呼んでるんだけど、全力でやらないようにしてるのよね。例えば、週末に野菜たっぷりのスープを作っておいて、平日はそれを味噌汁にしたり、カレーやシチューにしたり、チャチャっと済ませられるようにしてるよ。盛り付けを工夫するだけでも、少し特別感を出せるしね。」

あかねはそのアイデアに興味を示し、かおるの話をさらに聞きたくなった。かおるは続けて言った。「私たちは、平日と週末で料理スタイルを変えるようにしてるのよ。平日の手抜きは、週末の特別デーで新しいレシピに挑戦するための準備。日常をステージに見立てて、少しずつ精進していけば、それ自体が家族の成長ストーリーになるんだよね。」

あかねが笑顔を浮かべ同意した。「成長ストーリーってなんだかゲームみたいですね。自分のキャラクターを育てていくような感じです。ちょっと気が楽になりました。今頑張りすぎて疲れてしまったら仕方がないですよね。」

かおるはあかねの気持ちを受け止めながら、自身の話も続けた。「本当に疲れる時ってあるよね。先週なんか、仕事がめちゃくちゃきつくて、週末何もしたくないって思ってたんだ。でも土曜日の朝は私の担当で朝食を作る日で、パンケーキを焼いたんだけど、娘が粉まみれになりながらかき混ぜたり、夢中で盛り付けてくれてね。あんな時間が疲れを吹き飛ばしてくれる。小さな幸せを感じる瞬間は大事だよね。」

あかねはうなずき、微笑んで話した。「そうなんです。私も最近は一日の終わりに、旦那と一緒に美味しいものを囲みながら、今日あったことを話したりする時間が一番幸せかもしれません。でも、たまに話していると、意見が違うなと気付くこともあって、それがちょっとした喧嘩になったりするんですよね。例えば、タオルの畳み方が違うとか、そのくらい小さな事で意見がぶつかることもあります。」

かおるはあかねの言葉に共感し、昔を懐かしむように笑いながら答えた。「私も味噌汁に入れる具やその切り方で、それは違う、あれは違う、って喧嘩してたっけ。今となっては、そんなの気にもしないけどね、ハハハ。そういうときはさ、ちょっと工夫して、ペットの犬から仲直りの手紙を送ってたよ。」

あかねは笑い、共感をさらに深めるように続けた。「ワンちゃんからの手紙は、許すしかないですよね！やっぱり、みんな同じような経験をしてるんですね。自分だけじゃないって思ったら、すっごく安心しました。」

かおるはあかねの顔を見てうなずきながら、自身の経験を次のようにシェアした。「そうそう、結婚した当初はそんな感じだよ。大抵は同じような所でぶつかり合って、だんだんそれを笑い合ったり、許し合ったりしながら、家族の形ができあがっていくんじゃないかな。」

あかねはその言葉に気負いが消えて柔らかい表情を見せた。「そうなんだ、みんなそんな風に育っていくんですね。何だか将来のこととかも、悩むよりも、もっと楽しめるような気がしてきました。」

ビアガーデンでの会話は、あかねの心に深く響いた。年齢や立場が異なるチームメンバーが、それぞれの経験を共有し、理解し合うことで生まれる信頼や一体感が、自分自身を安心させていることに気づいた。

ビアガーデンで盛り上がった翌週、彼女のスマホに一枚の写真を添えたメッセージが届いた。差出人はかおるだった。

「実は最近、鈴木さんの新婚生活の話を聞いたのもあって、うちも初心思い出したよ(笑)。それで、久々にうちのワンちゃんに手紙を届けてもらったんだ！」

添付された写真は、思わずクスッとしてしまうような、犬の首輪にメッセージカードがぶらさがっているものだった。「今週も頑張ったアナタへ。今夜一緒にクラフトビールはどう？(*´V`)/」と不満げなワンちゃんの表情とのギャップがかわいらしかった。

かおるのメッセージは次のように続いた。「私自身、子育てでバタバタしてて、旦那とギクシャクしてたところだったんだけど、鈴木さんの話を聞いて、タイムスリップしたみたいだったよ。おかげで、ビールを飲みながら、じっくり旦那と話し合う、いいきっかけになったわ。そういえば、あの頃みたいな顔文字また書いてみようとしたけどどうまく書けなかった…orz (´Д`)」

あかねはそのメッセージと、写真を見て微笑まずにはいられなかった。その世代特有の顔文字にも心が和み、次のように返信した。

「素敵すぎます！ワンちゃんの可愛い写真、また見せてくださいね。^0^」

※この物語はフィクションであり、実在の人物とは一切関係ありません

© NEC Corporation 2025